

教育分野協力隊事業

実施地域 サン・サンヴァドル県、サン・ミゲル県、ラ・リベルタ県、ラ・ウニオン県、サンタ・アナ県、チャラテナンゴ県、ソンソナテ県



1. プロジェクト要請の背景

エル・サルヴァドルへの青年海外協力隊員派遣事業は、同国のメキシコ五輪代表選手団の強化を支援する目的で、1968年に体育分野の隊員を8名派遣したことから開始された。それ以降、体育分野だけでなく、様々な分野での協力を実施すべく隊員が派遣されたが、派遣事業は内戦によって1979年に一時中断された。隊員派遣は、1992年の内戦の終結を受け、1994年に再開され、体育教育をはじめ、理数科教育・日本語教育など、様々な教育分野で、人材育成のための隊員派遣が実施されてきた。

本評価は、1994年から今日までの、教育省配属の隊員による技術協力を評価対象としている。

を輩出する。

5) 投入

日本側

一般隊員 計36名

エル・サルヴァドル側

施設、機材

2. プロジェクトの概要

(1) 協力期間

1994年度～2000年度

(2) 協力形態

青年海外協力隊

(3) 相手側実施機関

教育省 (MINED)

(4) 協力の内容

1) 上位目標

様々な教育分野に携る人材を育成・再教育し、将来的に優れた教育者を輩出する。

2) プロジェクト目標

教育者の育成・再教育による、国全体における教育レベルの向上を図る。

3) 成果

多くの卒業生や日本への長期または短期研修生

3. 調査団構成

JICA エル・サルヴァドル駐在員事務所

(現地コンサルタント: Barreiro & Katsumata Associates に委託)

4. 調査団派遣期間 (調査実施時期)

2000年12月～2001年3月

5. 評価結果

(1) 妥当性

隊員派遣の目的は、エル・サルヴァドル側カウンターパートに対して、様々な教育分野に関する技術・知識を移転することである。よって、エル・サルヴァドルの社会経済的発展の促進に寄与するものであり、妥当性が認められる。

(2) 目標達成度

隊員の教育協力は、体育、理数科、日本語など、7つの教育分野で実施された。カウンターパートによる隊員に対する評価 (活動成果を「非常に良い」「良い」「普通」「乏しい」「ほぼ皆無」の5段階で評価。全隊員36名中、33名に対して実施) をみると、評価対象隊員全体では、「良い」が18名で最も多く、「普通」が6名、「乏しい」と「ほぼ皆無」が各4名、

「非常に良い」が1名と続く。隊員評価の平均値を求めると「普通」となり、全体的には、隊員による技術・知識移転は進展していると評価できる。

(3) 効率性

内戦前に隊員から学んだ者が、MINED や他の主要機関の幹部に登用されていることなどもあり、エル・サルヴァドル側の協力体制は整備されていた。このことから、協力隊の派遣体制としては効率性が高かった。

(4) インパクト

隊員らは、専門分野の技術移転のみではなく、始業時・終業時の挨拶、整理整頓、時間厳守の重要性などについてもカウンターパートらに説き、実践した。隊員の粘り強い指導により、カウンターパートや生徒などの間に挨拶の習慣などが浸透し、それらが授業効率の向上や職場内の秩序保持にいかにか大きく貢献するかを実証した。

こうしたことを通じて、日本人や日本文化に対する理解も深化しているといえる。また、日本での研修から帰国したカウンターパートによって、日本語コースが開講されるなどのインパクトもみられる。

(5) 自立発展性

隊員は、教員の指導というよりは、授業などに直接的に携わっていることが多く、協力が役務提供的になりがちであった。そのため、隊員派遣終了時点で、知識・技術移転がどのくらいなされているのか、また、その成果を活用しての授業法改善がどれほど進展するのかといった自立発展性を支えるシステムがどれほど構築されているかを見極めることは、極めて困難である。

6. 教訓・提言

(1) 他のプロジェクトへの教訓

エル・サルヴァドルに対しては、長期にわたって隊員派遣が行われてきたが、ほとんどの場合、エル・サルヴァドル政府からの申請に応じその都度派遣してきたため、隊員の戦略的派遣という面については、計画性に欠けるところがあった。派遣に際しては、隊員活動の具体的な効果を考慮したうえで、エル・サルヴァドル政府側で派遣計画を立案する必要がある。

隊員によるカウンターパートの指導や授業の実施



体操競技の指導

などに際しては、隊員が比較的高度な語学能力を習得していることが望まれる。語学能力の習得度合いには個人差が表われるものであるが、例えば、派遣の1年目に隊員に対する語学教育を重点的に実施するなど¹⁾、全派遣期間を見据えて、隊員のより効率的な活動を保障するための取り組みが行われることが望ましい。

(2) 提言

隊員の専門性を有効に活用するために、隊員側とエル・サルヴァドル側とでさらに多くの意見交換の機会を設ける必要がある。

7. フォローアップ状況

上記の提言を受け、教育省の各部署との意見交換会を開催している。体育分野に関しては、月例会を設け、隊員も参加しての重要な情報交換の場となっている。理数科及びコンピューター教育に関しては、すでに何度か会合を設けているが、今後の方針について教育省内で調整中である。

注1) 隊員は派遣前に約1か月半、任国到着後に約1か月の語学を中心とした訓練を実施しており、さらに着任後1年程度経た段階でブラッシュアップ語学研修を実施している国もある。